

文字は永遠の魂である

言葉は、人間にとって、最も大切なものの一つです。私は、「言葉こそ人間そのものである」というように感じています。

それは、カマラが、言葉を理解した時に、初めて、喜びや悲しみや恥じらいの感情をもつようになった、という事実が、これを何よりもよく表現していると思うのです。

ところで、人間は、言葉(音声言語)の上に、文字という視覚言語を発明しました。人間は、言葉によって人間になりましたが、人間は、この文字によって、その能力を飛躍的に高めることができるようになったのです。

言葉は、すぐに消えてしまい、しかも遠くには伝わらないという、時間的にも空間的にも極度に制限されていたものを、文字という、時間的にも空間的にもほとんど無限大といえるほどに拡大する力をもったものを作り出すことによって、人間の生命を、永遠なものに近づけさせることを可能にしたのです。

その本質からして、今まで不安定で揺れていた言葉も、文字の発明により、その支えを得て、ずっと安定したものになりました。今まで、

絶えず揺れていて、とかくあいまいだった精神も、文字によってはっきりと示されるようになりました。

言葉は、文字によってその価値をいっそう高められた、というこの事実を、私たちは見落してはなりません。

しかも、文字のおかげで、私たちは、釈迦やキリストや孔子に近づいて、親しく語りことができるようになったのです。

ところが、「言葉は精神だが、文字はそれを入れる容器だ」と言う人がいます。言葉は大切に、これを他から借りてくることはできないが、文字は捨てることも、他から借りてくることもできる、と言うのです。

言葉と文字との関係を、このように切り離して考えることは、精神と肉体とを切り離して考える考え方よりも危険です。私は、精神あつての肉体、肉体あつての精神だ、と考えて、精神を軽視する肉体観、肉体を軽視する精神観を否定しますが、言葉と文字との関係は、精神と肉体以上に緊密な関係にあるものだと考えているものです。

初め、文字というものが発明された時には、聴覚に訴える言葉を視覚に訴えるものに換えた、というのにすぎませんでした。その意味では、容器という表現も認められましょう。

しかし、文字はいったん用いられ始めますと“音声言語”である言

葉に対する“視覚言語”として、むしろ言葉以上に、人間の心を表わす働きを始めたのです。

それだけではありません。遂に、文字によって、言葉を作り、精神を生み出すまでになったのです。「仁」「義」「礼」「智」などは、文字によって生み出された精神の一つです。

たとえば、「仁」は、言葉として見る時は「人」です。人間の人間に対する愛、英語でいうヒューマニティー(ヒューマンは人間の意)を、「人と人」、つまり「仁(二人)」という文字でこれを表わすことにしたのです。そして、言葉としては、「人」と同じく「ジン」と発音しているのです。つまり、仁という精神は、「仁」という文字によって初めて、確乎たる精神になりえたのであって、それまでは、あいまいとして人に示すことはできなかつたものです。